

博士論文内容の要旨及び博士論文審査結果の要旨

氏名(生年月日)	安居 和輝 (****年**月**日)
本 籍	*****
学位(専攻分野)	博士(感覚矯正学)
学位授与番号	甲第183号
学位授与日付	令和5年3月21日
学位授与の要件	学位規程第3条第3項該当
論 文 題 目	失語症の地域リハビリテーションに関する QOL 研究
審 査 委 員	教授 福永 真哉 教授 彦坂 和雄 教授 種村 純

博士論文内容の要旨

生活期失語症者へのサービスでは機能的自立度とともに QOL を評価することが重要であり、本研究では重度失語症者でも回答可能な生活期失語症者 QOL 尺度(LAQOL-11)を開発し、信頼性、妥当性を確認した。本尺度は 91%の失語症者に適用可能で、従来の同種の尺度に比べて適用可能性が高かった。症例の追跡調査を行い、状態及び環境の変化に応じて QOL 成績が変化することを確認した。また、生活期失語症者が参加する各種サービス、すなわち失語症友の会、就労サービス、通所サービスおよび訪問サービス利用者の QOL 調査を通じて、これらの諸サービス利用者間で ADL・APDL を含む機能評価、QOL 評価および年齢層の 3 者を基本次元として、それらの相違を明らかにすることができた。

博士論文審査結果の要旨

審査会では発表者から予備審査以降の修正点の説明があり、そのうちの対象者の認知機能の評価方法について確認した。審査員からは次のような指摘がなされた。①対象者の失語症タイプの分類に偏りがあり、生活期失語症者を代表するデータといえるのか。②友の会、就労支援、訪問リハ、通所リハの 4 サービスを取り上げているが、生活期失語症者が利用する代表的サービスとして適切か。①について、発表者は失語症タイプ間、特に流暢方と非流暢型との間で QOL 分布に明らかな差は認められず、失語症の重症度が QOL 成績に大きく影響すると述べた。これに対し審査員は対象者データの分布に関する本研究の限界を記載することを求めた。②では、大きく介護保険、障害者福祉、自助グループの三者をとらえており、生活期失語症者の QOL の実態を広くとらえることができたと回答し、審査員は了解した。